



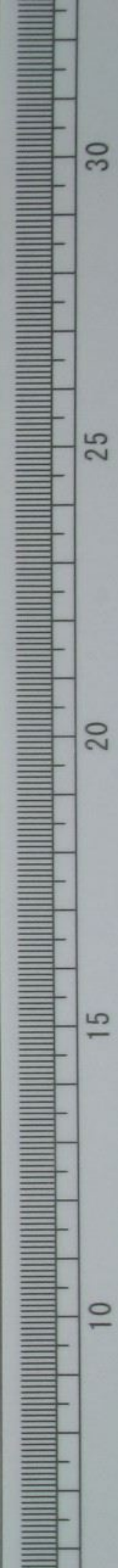
經驗醫方

引艸

ヨタシノ子ナ

三

十武
43
3



筆道替古早學問

全四冊

入木道ノ秘密口傳悉ク顯ハシ格法七十五
点ノ筆道與義ヲ記シ諸流ノ筆形筆跡ヲ
ツメ筆道訓ノ傳授正躰八景詩哥極則四躰千字文國字引能書手習法
名言等ヲ集メ載ス此書ヲ見テ手跡ヲ替古スレハ上達スルヲ神ノ如
其外詩哥ノ仕様石印彫様ホマデ初學ノ便ニ成ルヲ記ス

人家

万寶

大益

重法

之書

全部
九冊

初メ二冊ハ人ノ万
室ノ第一長生富貴
ヲ持ツ心得ヲ記ス心
持様ニテ父子兄
弟家内安樂暮サレ
身ノ行ヒ方ソ外徒
益アウ世ニケ条ヲ
解キ示シ次ニ下ニ
記ス智術全書七冊
ヲ副シ弘メ申シテ
此書ニコトニ人家
ノ万室ヲ生スルノ
書ナリ

錦

囊

智

術

全

七冊

智恵ヲ以テ重キヲノ輕ク出来ナラヌヲ
心懸ク調ク奇妙ノ秘傳秘密ヲ書アラス書
ナリ其集ル所凡ノ有無日知ノ晴雨日取
吉凶舟ニル法水煉ノ法地震雷前方ニ知リ
心山ニ木ヲ生シ井戸ヲ清水トナシ占ノ妙術
妙茶打撲金瘡治方男女ヲ養人ニスル救ノ法
衣服器炊ニ付サレハノ妙術魚鳥ヲ貯ニ料理妙法
虫獸モクサレタルヲ治シ或ハ蚊鼠ノ類スベ
テ虫ヲ除キ艸木ノ蒼ヲ自由ニ咲セ菓ヲ多
ナラセ或ハ久シク貯エ様ソ外此書ヲ用イテ
事ヲ為サバ徳益廣大方室ヲ得ルノ書ニシテ
先ニ行ナラシム博物筌ヨリモ此書ニ集ル所
猶亦勝レルヲ倍々ナリ

四聲字林集韻大全

全一冊

字ノ誤リヲ訂シ大ニ改正精撰仕名
オクニ正俗字例兩韻弁義其外詩作
浪華書舖吉文字屋
定榮堂精造訂本

よたれろつねな三目錄

よの教

癰疔 赤ニ便毒ト

七丁メヲ

○ 癰疔ぬき茶

同

○ 同付茶

同

○ 同口茶

同

○ 同付茶

同

○ 同内茶

八丁メヲ

門 七武
番 43
巻 3

○ 癰名方 規者也

同

○ 癰疔の妙薬

同ウ

○ 癰疔瘡奇効良方

同

○ 烏膏 癰疔一切の腫物を搦り
やけど等もよ 九丁メヲ

○ 烏麻膏 十三種の癰疔腫物熱毒
毒虫蟻等もよ 同ウ

○ 神仙丈七膏 癰諸瘡諸毒虫蟻等
咬らるよやけど如癰癩 十丁メヲ

○ 便毒ト一薬 三言 十丁メヲ

○ 同 丕潰と口を向け膿と出す方 同ウ

○ 便毒貼薬 同

○ 同内薬 同

○ 夜啼の薬 小兒 十二丁メヲ

たの部

○ 癰の名方ニ方 同

○ 癰よて腫らるふよ付薬 十三丁メヲ

○ 癰妙薬 つまらざる時よ 同

○ 同 同

○ 瘰癧を治す要薬

同ウ

○ 同

同

○ 禿癬白禿妙薬

十四丁ヲ

○ 同 呪ふ

同ウ

○ 同 妙薬 八方

十五丁ヲ

○ 同 癩なまずももこう

十六丁ヲ

○ たぐき目あくひ薬

同

○ 秘傳瘰癧れ妙灸

同

○ 脱肛だつこうの薬

同

○ 同 付薬

十七丁ヲ

○ 又方

同

○ 同 内薬

十八丁ヲ

○ 同 浸し薬

同

○ 康た重よといふ虫陰囊おんのうなどへ喰くい入いるを治す

十八丁ヲ

○ 大便べん結けつするを治す

同ウ

○ 大便べん握みぎり下くだし方

十九丁ヲ

○ 同妙方 同

△ くの散 簽刺の葉これ散よ毒考へ合すべし

○ そげまゝ茶 十九丁メウ

○ 同 同

○ そこ海りれ茶 二十丁メウ

△ つの散 同

○ 瘡を治す 同

○ 婦人の瘡血の力を治す 同ウ

○ 頭痛名方 同

○ 同竹茶 九丁メウ

○ 頭痛の茶 同

○ 同名方 同

○ 同 同

○ 頭痛ト一 九丁メウ

○ 突眼の妙茶 同

○ 突目又ハ翳障俄よ生すと治す 同

○ 寒疝愈く後又腫るるを治す 七三丁ニテ

○ 擊つんがと治す 同

○ 痛風四肢疼うづ而しよ敷茶 同

○ 同蒸茶 同

○ 邪崇つきもの 同

○ 又方 九四丁ニテ

ねの部

○ 眠ねを覺さす茶 同ウ

○ 睡多ねを治する方 同

○ 大病の後晝夜睡ねこしつといづるを治す 同

○ 氣の交かつりよ付茶 九五丁ニテ

○ 同 三方 同

○ 盜汗しやく ねあせを治す 二方 同ウ

○ 瘧ねの茶 ば茶百腫物もよう 九六丁ニテ

なの部

○ 癩風かの茶 二方 同ウ

○ 癩風の妙薬

北七丁メヲ

○ 同

白黒ともよし

同

○ 癩瘻足の薬 二方

北八丁メヲ

○ 陰瘻て起るす陽衰るるよ用る方同

○ 長血の薬 赤白帯下 二方

同ウ

○ 同止薬

同

○ 難産れ薬 催生 四方

北九丁メヲ

○ なつがれ薬

三十丁メ



よの部

○ 癰疔 并ニ便毒下

藤井呂求子見隆纂輯
長岡恭齋丹堂校正

一 大蟹 毒いころをき 麻茸 沉香 烏耳草 粉うし 各中か

右 酒よて少し 碎ふかど 月由べし 腫れ膿と

らむ 壺かつ 月由 長附も 耳草ハ 亦かへし

○ 癰疔ぬき薬

一 雌黄 白蛇 石灰 美石の粉

右 藥葉の汁よて 板し 茄子の實かど 腫

おの口へさすべし

○癰疔の付薬

一黄牛角 焼く 胡椒 炙りて付べし

○同口薬

一黄牛齒 焼く 胡椒 炙りて付べし

○又方

一藎 垣衣草 沉香 麝香 白粉 二分

一 批粗のくりやき 焼く 粉をこして付べし 又批粗

とすりて腫らるるをよけてよし

○癰疔内薬

一 大黃 芍薬 黄耆 黄芩

括樓根 茵陳 沉香 甘草

右煎法つものごとし

○癰疔名方 規法が

一 野田貝の中へ醋と入る炭火にて焼醋へり

たぐむに皮へ添へし 黄柏 赤小豆 苦参

名等分 び三味の目かど貝と合せよとれ

米の醋よりすくし合癰疔首と十字字し

刺割さしきり右みぎれれ茶ちやと一日いちにち二百にひゃく夜よも右みぎれれ茶ちやよよてて引ひき
 たり。又またくくううりり損とんずずるるもも其その上うへへへ引ひき。上うへよよもも
 本もと茶ちやととああららすするるなり

○癰疔ようぢりょうの妙茶めうちや

一人参ひとりじん 八霜はつそう 取草とくそう

粳米じやうまい 和わ 紅こう 乾かん 煎せん 湯とう

右みぎ酒しゆよよてて月つき。右みぎ氣きのの食くつつるるよよし

○癰疔ようぢりょう瘡そう奇効良方ききうりやうほう

一いち南なん帰き 連翹れんぎやう 香附子かうぶし 芍藥しやくやく 地黃ぢやう

川芎せんきゆう 桔梗ききやう 苦棟皮くどうひ 大黃たいかう

茯苓ふりやう 縮砂しゆくさ 木香もくかう 白本はくほん

白芷はくぢ 荊芥けいがい 茯苓ふりやう 芥がい 麻ま

人參じんじん 乾姜かんきやう 麝香じやくかう 甘草かんさう

右みぎ名な細末さいまつ一いち包ぱう四し里り分ぶんづづ或あるハハ煎湯せんとうよよてても

○癰疔ようぢりょう一切いっけつの腫物しゆぶつ膿うみづづるるよよももいいままでで膿うみこ

ろろよよもも法ほうのの赤損せきとん疔ぢりょう甚しんききよよもも付つてて取とら
 痛いたととぬぬ膿血うみちゆうとと自みづからら押おしし。陽火傷やうかたう
 付つくくめめととかくかく愈いす

一鳥膏

清油 十五 黃柏 一兩 杏仁 五兩

乳漿 雞の卵の白 皂莢 一枚 桑皮 仁を去

右の薬油を浸し一煎をき乾夕いりよる文

火よて煮こぐす。其後渣をうり又煮て臘月

一搽うり 猪油を煉合せ其後松脂 五

麒麟竭 五兩へく其後麝香 五分 加へこ

かさ合也

○烏麻膏

一癰疽十二種疥癩久く愈ざり膿血熱毒

或ハ諸毒蟲を蝨れ大龍骨を咬れりみ付

て立ふよりの年久き瘰癧又ハ疥愈く後再び

とろりうろよ付れば膿血出く則痛をぬ肉を生

て効あり

清油 十六兩 唐蠟 四兩 丹 四兩

右年の刻より煉の初まで煮 文火よて丹

と入次し唐蠟とへ煉べし。以茶調合のときハ

小兒婦人雞犬等近 魚くし

○神仙大乙膏

一癰疽瘰癧の瘻年月久きも手きよも傳て

治す。又膿を吸あすも。又諸毒虫蛇獸の咬くも

湯火傷切疔突疔

清油 百九目 香油

玄參

芍薬

白芷

肉桂

生草

各二支丹

六拾四五

何れも割之油に浸し。夏ハ二日。夏ハ三日。秋ハ

七日。冬ハ十日浸し。火よて焦やど煮て衣よ

て漉し。紙、煮し煉る。冷て後丹を入柳れ

篋よてかきませ再 弱 火よて久煮煉なり

○便毒下ー茶

一皂角皮刻考の茶一服りと煮四入夜君四

○同

一冬葵子を粉し酒よて一夜煮置くと服すべし

一肥皂子煮燒空心酒よて服すべし即腫消す

○同

一楮子の木をよ一末よ切水或律入み合よ煎

○便毒不潰と口とあけ膿と出す方

一燕屎 定粉白粉よても 牛蒡子 各五分

合粉よ一破すよて解付べし

○便毒貼茶

一樗實 皮なぐり黒焼 藜蘆汁よて

粘ちくとのべて付べし。又柳葉もよし

○同円茶

一 牛麻 葛根 各五分

右煮用也べし。但廿歳より内の人よ月也

老より人よハ人參散毒散と月也べし

○夜啼の茶 小児

一馬骨ひまの骨と粉こよし。乳ちよ付て用べし

△たの初はつきよりあつるハミの初産後の茶よし

○瘰癧を治す

一沉香 白木 羚羊角 白檀

一木香 香附子 人參 草撥

一縮砂 檀榔子 小兒 後茶

麝香きせう 丁香皮ていこうひ 麝香きせう 雄黄ゆうわう 白湯さゆ といくく 服くべい。 瘰れい及おひい 虚勞きよらう とい作さす
 一 陳皮ちんひ 皂角子さうかくし 枳椇子しききうし 木香もくかう 白湯さゆ といくく 服くべい。 瘰れい及おひい 虚勞きよらう とい作さす
 右 二十味 細末さいまつ 一 蜜みつ よて 一 火ひ さま 丸まる 一 粒りゅう づく
 白湯さゆ といくく 服くべい。 瘰れい及おひい 虚勞きよらう とい作さす

○瘰れいのな方ほう

一 陳皮ちんひ 皂角子さうかくし 枳椇子しききうし 木香もくかう 白湯さゆ といくく 服くべい。 瘰れい及おひい 虚勞きよらう とい作さす
 右 細末さいまつ 一 糊こう よて 一 皂さう 粒りゅう 一 火ひ さま 丸まる 一 粒りゅう づく
 ままくく 用よう 也や

○瘰れいよて 腫しゅ づく 一 附つ 子し 付つ 茶ち
 一 天てん 南なん 星せい 麝香きせう 一 草くさう 麻ま 子し 二に ツつ やや どど
 右 三味 薯蕷皮しよじゆひ とい 去き 餘よ すす 一 煉れん 合が 腫しゅ づく 一 附つ 子し 付つ 茶ち
 付つ べい 一 日にち 一 二に 三さん 夜や も 付つ 子し 付つ 茶ち

○瘰れい妙めう 茶ち

一 杏仁あんじん 薯蕷粉しよじゆふん 白檀はくたん 樟腦ちやうのう 右 四味 細末さいまつ 一 蜜みつ よて 煉れん 湯たう よて 用よう 一 氣き 瘰れい
 一 同どう

一赤小豆の粉をきぶき破すりて用。胸しよの痞つゑ

つり肘もよし。又方一皂莢さうけう 黒焼くろやき 蘿蔔子たわいこのこ 妙た

各等分 細末さいまつ 生姜しやうきやう 志し けり汁じゆ を蜜みつ よ三分一さんぶんいち 加か 右みぎ 此こ 粉こな

茶ちやと煉れん合ごう胡椒こせの大だい丸わん一いち夜や正せい粒りやく 此こ 粒りやく 白湯はくたうよて用

○瘰癧れんげんを治ちやうする要よう素そ 化瘰癧丸けれんげんわん

一系けい凡ふんと丸わんかぐく黒焼くろやきよして細末さいまつ一いち束たづみ

の肉にくよて○比ひ大だいささよ丸わん一いち酒しゆよて一いち粒りやくマ

服くわくす立た処ちよよ驗けんあり

○同 尾び粉ふん此こ藥やく丸わん

一切いっけつ癥しん結けつ滯ちよほり吐えども出いづく。久くく嗽せき已や

ず氣き塞さい了りやう妨ぼう問もん一いち瘰癧れんげん火か帶たい嗽せきよ利りて並なみ

よ効きうあり。尾び壅おん子し 蚶あか子し 壳かを火かよて煨やき醋じゆよ

浸ひし。又また煨や如じゆ比ひ三さん夜やすす。凡ふん葶てい九く月げつ

の比ひ黃わうをよ熟じやくししろを糝せん子しをを右みぎ此こ蚶あか

壳かよ和わ搗たうて餘あまののここくくよし。陳ちん皮ひと等とう分ぶん

よ加かへ陰いん乾かんよし。細さい末まつし。湯たうよ蒸じやう餅へいを浸ひ是こよ

て丸わん茶ちやとすべし。生せい姜きやう湯たうよて服くわくすあり

○瘰癧れんげん白はく壳か妙めう藥やく

一 膽礬 たんらん 五枚 大風子 たふし 五枚 明礬 めいらん 四枚

緑礬 りくらん 三枚 右 傳 つた 六夕 酥 す 六夕

水 みづ 六夕

右 酒 礬 水 合 して 右 の 茶 を 粉 ぶ して 炭 火
よ て 煮 て 付 り 納 り。 煎 極 初 日 八 日 次 八 日
次 八 一 時 以 上 三 日 納 り 左 妙 方 納 り

○ 頑癬 たじし と 呪 まじ ふ

一 小 刀 の 先 よ て 田 虫 の 上 と 小 虫 大 と 一 字
と いく つ も 書 べ ー

○ 同 妙 茶

一 百 草 霜 と 飯 粒 を 煮 け 煮 け 煮 け 煮 け 煮 け
傳 べ ー 奇 妙 乃 茶 納 り

○ 同

一 び っ ち びち 蠻 茶 ばんちや 納 り 大 黄 だいおう 粉 ぶ 一

黃 連 わうれん 粉 ぶ 一 人 参 じんじん 粉 ぶ 一

右 四 味 合 じ じ ー と す り 長 松 子 付 一

○ 同

一 あ ま が へ る 此 腹 煮 て す り て よ ー 奇 妙 納 り

○同

一 荜黃びわう仁にん研すて細末さいまつ一ひとる尿ひまのいぢりよて解と塗ぬる
へ一ひと立た処とよて愈なす

○同

一 生なま大黃だいわうの根ねとおろし煎ぢよ入。其その中ちゆうへ古き煤すす
的めう礬たんの燒や越やく一ひと剝く刀とう磁ぢとこそけ 各各自を
右みぎ酒さけよて純じゆんすり合あ付つべい

○同

一 虎耳草こみき 莖くき 大黃だいわう 酸漿水かきんこくすい 艸そう

右みぎ三さん色しきとすり合あ塩しほかし一ひとかへて付つべい

○同

一 石蒜いしぜんの根ねと竹小刀こてよて切き。其その切き口くちよてい
ろよもつつくくととすり合あ付つべい

○同

一 貝母かいぼと研すりて付つ寄よ妙めうなり

○同

一 硫黃りゅうわう 巴豆はとう 皮くわいと和入い黃わう 生せい
右みぎ細末さいまつ一ひと絹きぬよ包と下した地ぢと布ぬのよてすり合あ付つべい

のけと休べー

○たぐき目あらし茶

一 白礬焼通 縮縮よ包包こ乳乳汁汁を温温めて振振お

しさいくさいく洗洗ふべー 但但しし挽挽茶茶一一やど

○秘傳秘傳瘰瘰れれ灸灸

一 一〇〇一〇〇・三〇三〇・四〇四〇・五〇五〇・六〇六〇・七〇七〇・八〇八〇・九〇九〇・一〇〇一〇〇 替替れれひひ小小きき黒黒点点のの而

よ灸灸すべー 妙妙なり

○脱肛脱肛の茶

一 葶葶麻麻子子 百百草草丸丸 等等分分

米米泔泔の湯湯よよて腸腸湯湯させさせ水水不不どどろろくく腸腸を
温温めて右右乃乃茶茶糊糊よよて煉煉せせろろくくと付付べー

○脱肛脱肛付茶

一 大腸大腸 煙煙冷冷しして脱肛脱肛収収むむざるざるを治治するする方方。

蝸牛蝸牛と黒黒燒燒よよし猪脂猪脂よよてねりねり脱肛脱肛よよ

貼貼べー 立立処処よ縮縮里里大大よ效效ありあり 按按桑桑樹樹ノノ上上三三ア
ル蝸牛蝸牛ヲ用用テ更更好好

○又方

一 五倍子五倍子 半半介介水水を八八倍倍煮煮て爛爛しし白礬白礬十五十五

加加へ右右熱熱なりなりと長長まま桶桶よ入入脱肛脱肛を湯湯氣氣

よて燻温りよよておし托巴即収るなり。
又ハ右二味と細末一草鞋と熱あぐり。以上よ
茶と置いて脱肛とせろくと托ても収る也。
但始ノ内茶よハ人参黄蓍升麻の類ハ
方ヨシ一劑を服して全愈。又杏仁と炒搗て
膏とをかこれと付るも妙なり

○同内茶
一縮砂散 大腸虚すれば脱肛ある
縮砂 黄連 木賊 各等分

右粉よ一飯のそり湯よて服す

○同 浸一茶
一艾糸を濃煮して脱肛を浸すべし

○同
一葶麻子 市ト多シ 的禁 糸トあげびのり也
右ニを粉よし糊よて平め百令此穴よ張
べし。五処よ引込なり

○鹿虫とりん虫陰囊などへ喰入るを治す
一酒と虫よぬりそくべし。虫死してそのつらとれる

なり。ありあやまらしてじりりこれバ虫此肉よ
成りていつまでも痛るをのなり。たゞこれ脂と虫
よ付て虫もす

○大便結するを治す

凡ソ大便結ノ病証不一。風秘。氣秘。寒秘。熱秘。濕秘。品アリ
又胃ノ虛實ヲ察シテ治スベシ。又老人新産ノ婦人ナド氣血
虛シテ腸胃結澁シテ大便結スルモノアリ。宜ニ通利ノ藥ヲ用ユ
ベカラズ。恐ハ元氣ヲ傷ラ。惟血ヲ滋。燥ヲ潤ス。藥ヲ用ユベシ

- 一 茵陳
- 熟地黃
- 生地黃
- 麻仁
- 桃仁
- 杏仁
- 枳殼
- 厚朴
- 黃芩
- 大黃
- 甘草
- 耳草
- 煎一用

○大便掘り下し此方

右粉よ一蜜よて丸一子の内よ胡麻の油を
塗て握るべし。厚ハ別冷ありて子と洗ふべし

○同妙方

- 一 巴豆
- 毒を去
- 耳聾
- 大黃
- 韭子
- 硫黃
- 各粉よ一
- 皂粉よ丸一
- 山椒を粉よ一
- 粘よ押合せ

男ハ丸女ハ右の子此中ハ入右の丸茶と搦るべし。即ち下るなり。止んと欲セバ山椒と薑じて手と能く洗ふべし。

△うの節 蝨刺の茶此節は毒考へ合すへし

○そげ立する茶 竹本刺うろをそげ又ハこけ

一乾栗 黒焼 蠅 大 同 接 實 貝 中 月 日 黄 牛 角 生 結

右そく飯よて付べし

○同

一葛の葉小莖ともよ 黒焼

○そこまめ此茶

一鯨のひげと粉よし 粘よ押ませ付紙とよよして密膿ハ早く付べし

△つもの節

○瘡と治す

一奇效丸

揚梅皮 二十目 木香 三残り 人參 五目
胡黄連 四目 丁子 三目 胡椒 四目
甘草 五目 熊膽 五目 茯苓 五目

右丸となし辰砂と用て衣とす

○婦人の瘧血の乃を治す

白神散

香附子 各五

白朮 各五

和人参

麝香 麝香

参を
用也

寒晒糯米

甘草 各五

右細末し糊よて丸し湯よて用也

○頭痛名方

一香白芷

川芎

各五

大黃

酒よ

黄芩

各五

黄連 同

香附子 同

細辛 同

各中

甘草 各五

右細末し膏茶一うぐかと酒よて一日よ二夜

つ用也

上戸ハ碎かし

○頭痛付茶

一鉛

黒焼

火よて焼

鎔

つ時

硫黄

と栞

べし。黒く焼らなり。右痛ふし糊よて付

切こ付かへ巻し

○頭痛の茶

一芍薬

酒よて洗ひ

川芎

各五

香附子

酒よて搗

黄芩

酒よて洗ひ

白芍薬

白芍薬 芍薬の根を洗って搗碎す

防風

防風 防風草の根を洗って搗碎す

蔓荊子

蔓荊子 蔓荊子の果

藜蘆

藜蘆 藜蘆の根

右細末して用也

○頭痛名方

一 蟬蛻粉せみとうご一 大根の汁だいこんよて鼻の内はなへ

まぐり込まぐりこべー

○同薬

生地黄

生地黄 生地黄の根を洗って搗碎す

藤倉柴胡

藤倉柴胡 藤倉柴胡の根を洗って搗碎す

荊芥

荊芥 荊芥の葉

耳茶

耳茶 耳茶の葉を洗って搗碎す

一 小麦藁こむぎわら一 米こめよ切き獨ひとりよてりりやき焼やき右酒

よてけー二夜焼よてけーふたよるやき

白芷

白芷 白芷の根

細辛

細辛 細辛の根

柴胡

柴胡 柴胡の根

各粉それぞれよして湯ゆよて用也。眉まゆの間痛あいのむよハ

藜蘆れいろうハ 加くわへ用也

これ合あは・皂そう不ふどどよ丸まる一 衣ころもよハ朱しゆなり一

包つハ粒つぶ也。一 煎せん冷ひやせむ下くだる也。止し夜よ附つけを

湯ゆよて足あしを洗あふべー

○頭痛トー

一 赤地利あかぢり 黒燒くろやき 古苧麻こじま 白しろ 麒麟竭きりんけつ 赤あか
 右細末みぎこま 湯ゆ 以て 丹也に 産後さんご 産前さんぜん 此頭こゝ
 痛いた よよし。髪かみ のぬけるよよし。又ハ眉毛まゆげ ぬけ
 るよよし。下血げけつ よハ酒さけ 以て用

○突眼の妙薬

一 藜苳れいそう 荷か の白根しろね と絞しぼ り汁じゅう と塗ぬ り付け てはし 又
 木通もくとう 糸いと 糸いと 汁じゅう のこして付け べし。竹刀ちくとう 以て突つき
 も。ハ茶ちや を付け て癒い へり

○突目又ハ翳障かしょう 候まじ よ生な するを治す

一 蠅あぶら の頭かぶ を和や せ 次つぎ 食め 粒つぶ 女に の乳ち 汁じゅう 以て 煉あ
 合あ せろし 以て 治す 一 祚そん 効き あり

○突疔つきまが 愈い へ 後のち 又腫は るを治す

一 藜れい 苳そう 黒燒くろやき 小角豆せうかくまめ 五ご 艾あ 糸いと 糸いと 汁じゅう 以て
 右地湯みぎぢ湯 以て用也

○龍耳りゅうに と治す

一 附子ぶし と酢す 以て 浸ひ けり 削け ぎ 小指せうさ の如ごと 一 耳みみ へ
 入い べし

○痛風つうふう 四肢し 疼いた むよ敷し 薬やく

一鳥賊骨とけづり粉より陳醋にて解之瘡
所と布にて指肉の色赤なりし時ハ茶と付
べし。又硫黄と醋にて解付りもよし

○同蒸茶

一柳の皮（佐あく皮）一分酒にて煮和らり付熱をす
ぐよ布は暴痛腫らり上へあせ蒸べし冷と
しハ又煮て丸易てよし。白虎歴布にて四肢痛
々虎の咬如く甚く痛と腫らよは方にて止べし

邪祟

丹溪曰俗ニ衝惡ト云ト和俗モコレヲ衝モトイフ

一桃仁五十碎さ水にて煮熱して汁と一夜よ
服す。吐逆するは治すなり。若二三日も病不
退して吐逆せされば又衣のどくよりして服すべし
○又鬼魅よ祀されて心氣よをうらり時ハ伏龍肝
と粉よりして鼻中よ吹入べし

○又方

一邪祟或ハ登程悲泣歌舞吟呻をどす
るよ蚕退紙と灰よりして酒にて服すべし

ねの部

○眠と覺す茶

一人参

茯苓

酸枣仁

生地黄

煎分熱湯よて用由ぬろけきハ却る眠る

○酸枣仁と治す方

一酸枣仁一五

好茶

二五生薬汁

よつけ灸

て微焦搗羅て散茶とを一匙亦白かどよ水七分入六分よ煎ど度て温め服す

○大病の後晝夜睡とあつらふと治す

一酸枣仁 榆白皮 芍药 水煎し服すれハ睡也

○煎の咬しりよ付茶

一燈心とわくく揉りかきり名焼はし水よて練付り

神よ茶と付しりふれと洗ひをりて付る

るのりり而とあつらひ付べ

○月

一薰陸 氣囊 号分 粉は咬る処ニ付べ

一又ハ 猫の糞 黒焼 麝香 吐よて作りて付べ

一又 相本 焼て 細はし糊よ押ませ付べ

一又 牡蠣 大石 灰 中 黄柏 中 粉はし 蘇葉 煎

の汁よて付べー

○同方

一 糲アヲよ 偶カクすこと合用也

○同方

一 白アヲ 鄼ク 躅ク 陰ケ 干ガ はして粉コ ぶー 付ツ て妙タ なり

○ 盗汗カク ねあせと治す

一 五倍子ゴト 細末サイ ー 唾ツ よて 枳キ の中チ へ塗ヌ ぬ

よて縛バ 一ヒ 夜ヤ 至シ て即ス 止ト 又マ 乳ニ 汁ジ よて五倍子ゴト の粉コ と

枳キ 合カ 蒸シ 熱ネ ー して丸マ ー 脐ヘ へ入イ 桃ト 核カ とニツツ

より方ハ 殺シ と蓋カ ぶー 縛バ 帛ヒ よて縛バ ぶー

一 又マ 自ジ 芷シ 一ヒ 味ミ 細末サイ ー 自ジ 身シ へ唾ツ よて解ト 脐ヘ の上ウ

よ塗ヌ もぶー

○又方

一 露ツ のある桑葉ク と早サ 乾カ ぬ採陰サイ 乾カ ぬー して

粉コ ぶー 一ヒ 夜ヤ ぶ 或カ 五ゴ 分フ ほどづ 飯イ の湯ユ よて食ク ぶ

より遠ト きて服ク ぶー 其コ の比ヒ よ 枳キ 枝シ たり

腐ク びり桑葉ク いろく妙タ なり

○ 癖ヘ の茶

此茶万腫相よぶー

一除鬼樹 一名あつこもり人。百毒虫の蟻くろふかして付へ

系小莖ともよ大釜へ入煮。系小莖ハより搗あとの汁を小釜よて初りつり。初むくとかろ付

蝸牛此粉を入煉合。初ぬと腫物にハ笥よて引へ。瘡ハ紙よ付胸よちりてはし

なよの勅 ながちあちちふの勅よもあり

○癩風の薬

一生養 明礬 硫黄 丹

右四味布ぎれよ包こつよく擦へ

洗ひ梅 砕よてとき六日やどなと付へ 赤

黒くぬ愈へ

○同

一硫黄 阿仙薬 丁子 香茅

右粉よして付へ。遍身よ多くとすつるハ時湯と浴て後薬と付り

○同引薬

一粉本 硫黄 二味 虎耳草 此砕と分加へ癩風と熱湯よてすり洗ひ石の薬と塗

虎耳草とすり刷毛よて引べー

○癩風の妙薬

一 蒼耳 藪ド 硫黄 各五 塩 各五

右ちりこの莖をよ一束よ切。其切口よ右に硫黄と塩と付癩風を擦べー

○同 白黒ともよー

一 いろうス なりそ 大胡椒 中 うろうろー

右粉よー熱湯よて洗ひ付べー

○癩癧の薬

濕熱れ者或ハ冷水と飲身寒腎弱を損
一 筋骨弱く起居奉初かここよ

一 清燥飲

黄芩 大 人参 大 蒼朮 中 茯苓 中

白朮 小 大味 小 甘草 小 芍薬 小 丹参 小

○又方

一 鬼絲子 各五 人参 中 甘草 小

右粉よー酒よて切こ用

○陰痿て起す陽衰するよ用る方

一雀卵白すいめのたまごのあらい 天雄製てんと 兔絲子とじ 二味細末にじ 雀すいめの

卵たまごよて桐子きりのこかどは丸まる一室心すきこころ酒さけよて五粒ごつぶ月つき

○長血ちやくけつの茶ちや 赤白あかくいやく帶下たいげなり

一馳いし 續ぞく隨子ずいし 七五上しちごじやうの皮かわを
玄げん油あぶらをらうりて

右二味みぎにじ調合てうがふ一いちがづづ白湯はくたうよて用もちゆ

○名血なけつ白血はくけつの茶ちや

一雀すいめ 白芍はくしやく茶ちや 多おほか 白粉はくこなか入いれ

右みぎ煎せん一いち服くわくす

○名血なけつ白血はくけつの止とど茶ちや

一圓まるい煎せん くらやき 上うへここ挽ひき茶ちやをまくく其その中なかへ

かか一いち加かへ用もちゆべ一いち忽たち血ち止とどるべ一いち

○報はう産さん此こ茶ちや 催もよほ生め

一雀すいめの巢のす 黒くろ燒やき 香かう白はく芷し 百ひやく草そう粉こな 葛くわ粉こな 香かう粉こな

はは十じゆ威いより肉にくれれ男おとこ子のこ小便せうべんをあ温ぬるてかきき立た

て用もちゆべ一いち逆さか産さん横よこ産さんもも即すく時ときよやす安やすくく産うまるる

○報はう産さんのの妙めう茶ちや 催もよほ生め

一禁くま膳の 香かう白はく芷し 桂けい心しん 香かう粉こな一いち

○同どう 催もよほ生め

一併手散

人参 枳殼

商陸

桂心

芍薬

地黃

附子

甘草

古粉よ〜百沸湯よて用也へト

○同 催生

一尚油

枳殼

于姜

桂心

計分

右の薬ハ一二服用て即ち産るなり

右赤白帯

雑産

の法

薬

ふの効

この効

よ赤可互考

胎ノ産ニ臨ミ破水テ遲滞セハ右ノ薬方

ヲ用テ効アリ邊テ早く催生ノ薬ヲ服スベカラズ

○なつぶ〜れ薬

小鬼从ら 效のさ〜〜りあと

一粒刻のもちつる土を唾よて解有べ

妙なり 法の畏のさるよ〜

